埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

描画テストに関する基礎的研究4：S-HTP法と枠づけ効果

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-07-26 キーワード (Ja): キーワード (En): Drawing test, Synthetic House Tree Person Test, the Fence Technique 作成者: 田畑, 光司 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/599

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

描画テストに関する基礎的研究４
― S-HTP 法と枠づけ効果 ―

A Fundamental Study on the Drawing Tests 4
the Fence Technique and Synthetic House Tree Person Test

田　畑　光　司
TABATA, Koji

This paper is intended as an investigation of the fence technique and the drawing patterns of the S-HTP test. The participants were 208 first-grade students. The non-fence group that involved drawing on an A4-sized white paper consisted of 135 participants; the fence group that involved drawing on an A4-framed paper consisted of 73 participants. The drawings were analyzed by the ordering of figures and 18 items about drawing patterns. The following results were obtained: the ordering of figures was the same in both groups, and there were many participants in the fence group who drew a tree first. The drawing patterns of the fence group proved to be larger and more integrative than those of the non-fence group. There were apple trees and scarred trunks, roots contact with frame line. The houses were bigger but the sizes of people were neither small nor large. The implications of these results are discussed in terms of the fence technique and the S-HTP test.

はじめに

注意集中が困難な、障害のある子どもの学習指導をするときに、机の上にひとまわり小さなマットを置き、その上で課題に取り組ませると子どもの集中度がぐんと高まる。これは、マットが空間を枠づけした効果であると考えられる。描画検査においても、白紙のままの用紙を使うか、額縁のように枠づけをした用紙を使うのかでは、描画に違いがあることはよく知られている。枠があることは、描画者に描画しやすさを感じさせる一方で、強制的な逃げ場のなさを感じさせるという（中井、197）。風景構成法はこの枠づけ効果を利用したものであり、枠づけの意味が検討されている（中井、1985；山中、1996；中野、2009）。バウムテスト（森谷、1983）、人物画（桜井、1984）、S-HTP法（細木ら、1971；荒川、2000）などについても、枠づけ効果の視点から報告がある。

描画検査の中でS-HTP法は、「家と木と人を入れて、何でも好きな絵を描いてください」という教示にしたがって、３つの課題を一枚の紙に描画するものである。課題を別々の紙

キーワード：描画検査、S-HTP法、枠づけ効果
Key words：Drawing test, Synthetic House Tree Person Test, the Fence Technique

に描かせるHTP法と同様に、描画された「家」と「木」と「人」についての分析ができる。また、それぞれの課題がどのように関連づけられ、統合されているかという視点からの分析もできる。HTP法の変形として創案されたが、研究の蓄積によって、HTP法とは異なる独自の利点があることが明らかにされている（三上、1995）。歴史が新しいこともあり、基礎的研究の報告は多いとはいえない（渋川ら、2007）。細木ら（1971）は、描画の解釈を深めようとして、荒川（2000）は、描画意欲を高めようとして、それぞれ枠づけを用い、一定の成果のあることを報告している。枠づけ効果に注目したこれらの先行研究は、いずれも事例を中心とする方法であった。本研究では、S-HTP法と枠づけ効果の関連性について、描画順と描画内容の分析という視点から検討することを目的とした。

方法

1　対象者　大学１年生208名（男子64名、女子144名）であった。

2　手続き　A4の白紙と、端から約20mmの位置に細字のマジックインクで枠づけしたA4白紙の２種類を用意した。枠なしの白紙を使用する枠なし群（135名、男子39名、女子96名）、枠ありの白紙を使用する枠あり群（73名、男子25名、女子48名）とした。S-HTP法は集団法にて実施した。教示は「この紙に、家と木と人をいれて絵を描いてください。終わった人は裏にある質問に回答してください。」であった。裏紙面には、「家」「木」「人」の描画の順番、一番描きやすかったもの、描き難かったものなどについて質問し、回答してもらった。

3　結果の整理方法

1）描画順：最初に描画した課題が「家」か「木」か「人」であるか、一番描きやすかったもの、描きにくかったものを回答から分類・集計した。

2）描画内容の分析：三上（1995）にならって18の分析項目を設定し、視察にて分類した。表１は、分析項目と分類の基準を示したものである。

結果

1　課題の描画順と描きやすさ、描きにくさ

表２は、描画順と描きやすさの回答結果を示したものである。描画順は、両群ともに、「家」「木」「人」の順であった。両群の差を見ると、「木」が枠なし群が17.8%、枠あり群が27.4%であり、違いが一番大きかった。描画順を回答しなかったものは、枠なし群は12.6％、枠あり群は0％であった。これらの値には有意差があった（χ^2=15.066、P<0.01）。

一番描きやすい課題についての回答では、両群ともに「家」「木」「人」の順であった。描きやすさの順は両群で同じであったが、出現の値に違いがあった。「家」を描きやすいとしたものは枠なし群では41.5%で、枠あり群では20.5%であり、枠なし群の値が大きかった。「木」では28.1%と47.9%、枠あり群の値が大きかった。「人」では25.2%と23.3%であった。回答しなかったものは、5.2％と8.2％であった。これらの出現率には有意差があった（χ^2=13.377、P<0.01）。

描きにくさについては、両群ともに「人」「木」「家」の順であった。両群の出現の差は、描きやすさの結果と比べて小さいものであった。この出現率には有意差はなかった（χ^2=4.503）。

表１：分析項目一覧

No.	対象	分析項目	定義
1	全体	描画サイズ	紙面の1/4以下か（小）、1/2まで（適）、1/2以上（大）か
2		統合性	羅列か、媒介による統合か、統合的か
3		遠近感	羅列のためなし、家木人の付近のみは中、遠くまでありは大
4		付加物	家、木、人以外に描き込まれたもの
5	人	位置	家の中か外か、屋根上か、木に接触しているか
6		人数	一人か、二人か、三人以上か
7		表情・動作	人に表情があるか、運動動作があるか
8		大きさ	家と比較して人の大きさが適切か
9	木	大きさ	家より大きいか、同程度か、小さいか
10		本数	一本か、二本か、三本以上か
11		実	木に実があるか、ないか
12		幹の傷	木の幹に傷や穴があるか、ないか
13		位置	紙を切断しているか
14		根の位置	紙の縁を地面としているか
15	家	大きさ	紙面に対して1/３以上（大）か、1/9以下(小）か、その間か
16		壁面	家の壁面が1面か、2面か、3面か
17		ドア窓など	家に描き込まれたもの
18		位置	紙を切断しているか

表２：描画順・描きやすさについて両群の回答（%）

群	最初に描画したもの		一番描きやすいもの		描きにくいもの	
課題	枠なし群	枠あり群	枠なし群	枠あり群	枠なし群	枠あり群
家	67.4	69.9	41.5	20.5	20.0	16.4
木	17.8	27.4	28.1	47.9	25.2	19.2
人	2.2	2.7	25.2	23.3	48.9	50.7
無回答	12.6	0.0	5.2	8.2	5.9	13.7
χ^2	15.066　P<0.01		13.377　P<0.01		4.503　N.S.	

2　描画内容

表３：各分析項目における両群の出現率（%）と χ^2 値

No.	分析項目	小項目	枠あり群（%）	枠なし群（%）	χ^2	P
1	描画サイズ	小	8.2	25.9	11.539	<0.01
		中	34.2	25.9		
		大	57.5	48.1		
2	統合性	羅列	39.7	59.3	10.532	<0.01
		媒介による統合	38.4	32.6		
		統合的	21.9	8.1		
3	遠近感	なし	67.1	76.3		
		やや	23.3	17.8		
		大	9.6	5.9		
4	付加物	なし	38.4	45.2		
		雲	19.2	18.5		

	囲い	1.4	3.7		
	太陽	30.1	27.4		
	草花	20.5	28.1		
	虫動物	27.4	29.6		
	道	8.2	9.6		
	川	1.4	0.0		
	車	4.1	3.7		
	他	16.4	10.4		
5人　位置	中に	23.3	13.3		
	上に	1.4	0.7		
	木に接して	11.0	3.0		
6人数	1	65.8	58.5		
	2	13.7	27.4		
	3↑	20.5	14.1		
7表情･動作	あり	69.9	51.9		
8大きさ	小	23.3	40.7	6.343	<0.05
	適	41.1	31.1		
	大	27.4	25.2		
9木の大きさ	小	17.8	18.5		
	同	23.3	25.9		
	大	58.9	55.6		
10本数	1	63.0	66.7		
	2	19.2	20.7		
	3↑	17.8	11.1		
11実	あり	28.8	14.1	5.233	<0.05
12幹の傷	あり	24.7	17.0		
13位置	切断	45.2	20.7	8.727	<0.05
14根の位置	紙端	49.3	20.7	11.200	<0.01
15家の大きさ	小	20.5	37.8	7.213	<0.05
	適	45.2	37.8		
	大	34.2	24.4		
16壁面	1	89.0	94.8		
	2	11.0	4.4		
	3	0.0	0.7		
17ドア窓など	戸なし	30.1	25.9		
	窓なし	8.2	11.1		
	屋根模様	19.2	11.1		
	煙突	52.1	48.9		
	カーテン	15.1	17.8		
	入り口階段	12.3	3.0		
18位置	切断	9.6	4.4	5.400	<0.05

分析項目の結果は表３に示してある。枠なし群と枠あり群で有意差のあったものは次のとおりであった。

１）描画サイズ：枠なし群は描画課題を小さく（枠あり群8.2%；枠なし群25.9%）、枠あり群は大きく（枠あり群57.5%；枠なし群48.1%）描くものが多かった（χ^2=11.539、P<0.01）。

２）統合性：枠なし群は統合性のない羅列が多く（枠あり群39.7%；枠なし群59.3%）、枠あり群は統合的なものが多かった（枠あり群21.9%；枠なし群8.1%　χ^2=10.532、P<0.01）

３）人物の大きさ：枠なし群の「人」の大きさは、小さいものが多く（枠あり群23.3%；枠なし群40.7%）、枠あり群では適切な大きさのものが多かった（枠あり群41.1％；枠なし群31.1％　χ^2=6.343、P<0.05）。

４）木の実：枠あり群は、「木」に実を描き込んだものが多かった（枠なし群14.1%；枠あり群28.8%　χ^2=5.233、P<0.05）。有意差はなかったが、「幹の傷」も枠あり群では多かった（24.7%；17.0%）。

５）木の位置：枠あり群は、紙面に収まりきれずに紙を切断して「木」を描画したものが多かった（枠なし群が20.7%；枠あり群は45.2%　χ^2=8.727、P<0.05）。

６）根の位置：枠あり群は、紙の下端、あるいは枠のライン上に根があるものが多かった（枠なし群20.7%；枠あり群49.3%　χ^2=11.200、P<0.01）。

７）家の大きさ：枠あり群は大きな家を描画するものが多かった（枠なし群20.5%；枠あり群37.8%　χ^2=7.213、P<0.05）。

考察

描画の教示が「家」「木」「人」の順であるのは、被検査者の心理的抵抗を配慮して、抵抗の低い順から並べたためであるという（Hammer、1958）。枠なし群も枠あり群も、描画順の結果は教示の順序とおり、「家」「木」「人」であった。しかし、枠あり群では「木」を最初に描画したものが多かった。課題の描きやすさの結果は、枠あり群では「木」が、枠なし群では「家」がそれぞれいちばん描きやすかった課題であった。描きにくさでは、両群ともに課題による差はなかった。これらのことから、枠あり群は、課題のうちでは「木」が最初に描きやすいものと判断して描いたのであり、枠なし群は「家」を描きやすいから描いた、と考えることができる。枠づけは、描画課題の中で描きやすいと思うものを描かせる、描画しやすくさせる、ことに影響したといえるだろう。

さらに、枠なし群では描画順についての質問に１割以上が回答しなかったが、枠あり群では全員が回答していた。回答率の高さは、検査への好意的な印象を反映しているとすれば、枠づけが、描きやすいものを描かせる、という考えを支持できるだろう。

分析項目の結果から、いくつかの項目において両群の描画に違いが見られた。描画サイズでは、枠あり群が課題を大きく描画する傾向があったことを示していた。課題の大小がエネルギーと関係するというが、枠づけ効果として、描きやすいものを描こうとしてエネルギーの表出に影響し、大きな描画になったのだろう。枠あり群の描画に羅列が少なく、統合性の高いものが多かったことも同じである。統合性を高くするためには確かな現実的検討力が必要であり、枠あり群はよく考えて、枠なし群はあまり考えず、単純に課題そのものを描画したにすぎないともいえよう。知的･情緒的成熟と関係があるいわれる遠近感では、両群の差はなかった。この成熟が、両群で同じ程度であったのかもしれない。

枠あり群の「人」は小さくもなく、大きくもないものが多かった。桜井（1984）は、幼児の場合に人物画では枠あり条件は身長が小さくなる傾向があることを報告している。枠づけは描画しやすさと同時に内面的なものを

表現させるとすれば、描画者が幼児ではなく大学生であった本研究では、描きにくい「人」であっても、描画しやすくなり適度な大きさの「人」を描画したことも考えられる。

枠あり群の「木」は大きく、実もあり、根が枠から出ているものであった。有意差はなかったものの、傷を描いたものも多かった。「家」も大きく描かれる傾向があった。木の実は努力の結果や結実点、傷は心的外傷などといわれる。森谷（1983）は、本研究の結果と同様に、枠づけのあるバウムテストでは、葉の模様や陰影、幹の傷や切断のあるものが有意に多かったことを報告している。しかし、用紙のはみだしは少なく、切断が多かったとする本研究の結果とは逆であった。この違いについては、次のように考えられる。根を枠の上に置くことは、枠が地面を連想させて、枠づけ空間内に相対的に大きい木を描こうとしたためであり、枠づけ群が描こうとした「木」は、大きくて実や傷があるといった情報が多いものであり、大きい「家」とともに、描きたいものを描こうとしたともいえる。いずれも、枠づけ効果として、描きたいものを描く、という視点からの解釈をすることができるだろう。

まとめ

本研究の結果、S-HTP法の枠づけ効果は、描きやすいものを描かせるものであることが示唆された。枠づけがあることによって描画が大きく詳細になる傾向のあることが示された。　このことが、描画者の状態をどう反映しているのか、その解釈はさらに検討してゆかねばならない。描画検査の解釈はマニュアル化しにくく、「全体的な印象」で表現されるような主観的な評価がなされることが多いが、客観性にこだわると紋切り型の解釈になる恐れもある。

最後に、描画検査においては、枠づけ効果のあることを配慮して、検査者が条件によって使い分けることが大切であることを指摘したい。

文献

荒川正吉（200）小学校スクールカウンセリングと「枠づけ・S-HTP法」の試み．臨床描画研究、XV、170－187.

Hammer, F. (1958) The House-Tree-Person projective drawing technique : content interpretation. In : Ed by Emanuel F. Hammer : The Clinical Application of Projective Drawings. Charles C Thomas・Publisher, U.S.A., pp.165-207.

細木照敏、中井久夫、大森淑子　ほか（1971）多面的HTP法の試み．芸術療法研究会誌、第３巻、61-67.

三上直子（1995）S-HTP法―統合型HTP法の臨床的・発達的アプローチ．誠信書房.

森谷寛之（1983）枠づけ効果に関する実験的研究―バウムテストを利用して．教育心理学研究、第31巻、53-58.

中野江梨子（2009）風景構成法における枠をめぐって．In：皆藤章、現代のエスプリ505　風景構成法の臨床、至文堂．pp75-86.

中井久夫（1985）中井久夫著作集・精神医学の経験、第２巻　治療、岩崎学術出版社.

桜井茂男（1984）幼児における人物画の大きさと有能感および体格の関係．教育心理学研究、第32巻、54-59.

桜井茂男（1988）幼児における有能感と人物画の大きさとの関係―枠づけ法を用いてー、教育心理学研究、第36巻、63-66.

渋川瑠衣、松下姫歌（2007）統合型HTP法に関する研究の展望―「統合性」・「遠近感」・「人と家・木との関係付け」に着目してー、広島大学大学

院心理臨床教育研究センター紀要、第６巻、
52-66.
山中康裕（1996）風景構成法その後の発展、岩崎学
術出版社.